

「開業医のための消化器クリニック」

多賀須幸男 著

日本プライマリ・ケア学会副会長，鈴木内科医院・院長

鈴木 莊 一

まず本を開くと，口絵として 18 枚の内視鏡写真と腹部超音波画像 45 枚に圧倒される。関東通信病院退職後，開業以来の症例からすべて選ばれている。どれも鮮明で，解説は簡，要を得ている。

多賀須先生とは昭和 40 年代初期，国立がんセンターで市川平三郎先生の指導を受けていたころ，読影会でよく顔を拝見していた。既に開業していた私は，当時多かった胃癌の早期発見に魅せられ，そこに医師としての生き甲斐を覚えていた。そのころから 35 年，内視鏡は驚異的に進歩し，超音波診断も第一線医師の有力な診断機器となった。プライマリ・ケアの同じ開業医として，多賀須先生の本を食い入るように読んだ。実に共感するところ多く，引用したいところは随所にある。先生の言われるように，消化器診断の面白いところは，開業医でも“知識”と“わざ＝うで”を持っていれば，身体的診察のうえ，内視鏡と超音波診断装置などを上手に使うことによって，

大病院の医師と遜色ない水準で消化器病に対処できるところである。むしろ開業医は患者と近接的な人間関係があるので，診断・治療に満足感があり，継続性からも，現在の重要課題である医療費節約にも貢献している。序文にもあるが，開業していると，たちまち時代遅れになりそうなコンプレックスに陥る。これだけは知っているべしというタイトルの特集号がつつぎに発行されるが，とても付き合いきれるものでない。したがってこの本は，実用的な「洗練された消化器病診療」ハンドブックである。先生は，頭の知識だけではなく，自らの診療体験から書かれているので，迫力ある説得性があり，文章にリズムがある。

本の中身は，第 1 章「患者さんの評価」(A. 問診のポイント，B. 診察のポイント，C. 外来で行う画像診断のポイント，D. 臨床検査のポイント，E. 消化器癌の検診)，第 2 章「消化器症状の対症的治療」，第 3 章「消化器疾患の治療」に分かれてお

り，実に開業医の立場で歯切れが良い。例えば内視鏡検査時に先生は，血圧とパルス・オキシメーターによる血液酸素飽和度のモニタリングを行っておられる。“非常に有用性が高い”，と書かれている。また「開業の場での消化器癌の取り扱い」(p 76)では，よく統計を集められ，食道癌，胃癌，大腸癌，肝癌そして膵癌の治療成績の表を羅列され，手術適応の是非をはっきりと述べておられる。その中に，“病院は術後にあなたのところでは手に負えないだろうから当院で経過を見ます”という返事をしばしばくれるが，術後の患者さんの生活相談に上手く答えてあげるのは開業医である”にはまさに同感，至言である。「今日の治療指針」総編集者でもある先生の名著を，開業医，勤務医を問わずぜひお読み下さい。

● A5 頁 160 図 21 写真 46
カラー写真 24 表 16 1999
定価(本体 3,400 円＋税) 円 400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)